

鍛冶師  
ゆきのり  
自鷹 幸伯氏

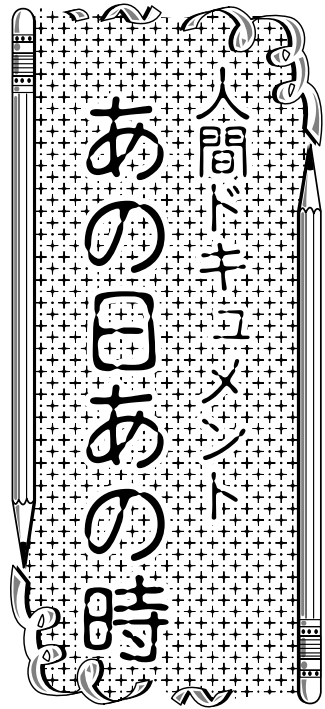
寿命一千年の和釘復元



(文・写真  
学生記者・大谷 秀之)

しらかが・ゆきのり 昭和10(1935)年、松山市生まれ。中央大学の通教生として勉学に励む一方で、家業の鍛冶屋を手伝う。26歳で上京、日本橋の木屋刃物店に就職し、中大法学部の夜間部に転籍。通算8年がかりで卒業した。

この間に宮大工・西岡常一棟梁と知り合う。兄の病死で、松山に戻って鍛冶に専念できたのも、同氏のアドバイスが決め手となった。昭和56(1981)年には西岡棟梁の指導で、薬師寺西塔再建用の鳳凰型和釘7千本を1人で鍛える。ライフワークは古代大工道具の復元。著書に『鉄千年のいのち』(草思社刊)。和釘復元に対し、ことし3月5日に吉川英治文化賞を贈られた。松山市堀江町在住。



和釘といっても「それ何のこと？」という人がほとんどだろう。飛鳥・白鳳時代、つまり千年の歳月を経ても錆びて朽ちることなく、建物を支え続ける古代の釘を「和釘」という。法隆寺の五重の塔などに使われている。その釘をいま知ったのは昨秋、NHKで放映された「薬師寺再建」の番組だった。そんな腕を持ったすごい人が中大の先輩にいらるなんて信じられなかった。「ぜひ、お会いして話を聞いてみよう」という思いに駆られ、さっそくインタビューを申し入れた。

# 一生を決めた西岡棟梁の一言

愛媛県の松山市内で鍛冶屋を営む白鷹幸伯さん。お宅のすぐ近くには瀬戸内海の波が打ち寄せている。「遠いところを、よう来たな」と、自慢の長いあこ髭をなでながら、終始、豪快なお父さんという感じで対応してくださった。「村の鍛冶屋という歌を大抵の大人は知つとるわなあ。あなたの親御さんも良く知っている歌じゃ。学校の帰り道に、鍛冶屋の前にしゃがんで見ているうちに、火の粉が目に入って大泣きする風景はもう見られない。みんな遠い記憶の彼方だ」。白鷹さんは天井を仰いだ。

## ★まず、先輩の子供時代の話から、お聞かせください。

——親父がここで鍛冶屋を始めていましたね。まあ、駅馬車の心棒を鍛えたり、車輪の輪金の修理や、サザエを挟む道具を作つたり、頼まれればなんでも作る典型的な野鍛冶でしたよ。僕は地元の高校と短大に通いながら、すでに親父の商売を継いでいた長兄の仕事を手伝つておつたんです。その後、中央大学法学部の通信教育を始めたんですが、4年たつても卒業できない。とにかくレポートが通らんのや。

この時、日本はいわゆる産業構造の変革期に入つておつた。道具は工場で作られるようになり、ええ仕事は少なくなる。なんぼ働いても暮らしは楽にならん。正直、鍛冶屋は最低の仕事やと思つた。3年ほどたつた頃、単位を計算したら104単位あつた。試験を受ければ転籍できることを知り、苦労している兄たちを残して上京した。昭和36年だった。日本橋にあつた刃物専門の老舗「木屋」に就職し、大学に通つた。鍛冶屋を捨てたくせに、転がり込んだ先が刃物屋とはね（笑い）。

当時、とにかく残業が多くてね、月に70時間ぐらいやつておつた。とても本を読むなんて生活ではなかつた。でも、会社にいいおばさんがおつてね。「早く学校に行きなさい」といって、僕の首をつかんで押し出してくれた。あり

がたかつたな。あの人は今ごろ、元気でやっているかなあ……。

## ★そのころの大学の様子は。

——学生がやたらに多かつた。普段の授業には30人ぐらいいしか出ないのに、試験のときは400人ほどおるんだ。それが当時の夜間部の現状だった。でも、いろいろな学生がおつて退屈しなかつた。都庁の人が大勢おつたし、警視庁の鑑識課の人がおつたし、親子で机を並べている人もおつた。その代わり面白いのはね、廊下を歩いていると、見ず知らずの昼間の学生が頭を下げて通りすぎるんや。そりゃそつだろう。こつちは28歳過ぎの大学生だったから（笑い）。

当初は弁護士になろうと思つていたが、こいつは直ぐにあきらめた。六法はさつぱり頭に入らんし、図書館に行けば行つたで、昼の学生が必死の形相で勉強しとる。こいつらには、とてもかなわんと思つてね。そのうち、刃物を扱うのが面白くなつてきた。「価値ある仕事だな。もう少し、この業界にいてもいいかな」と思つようになつた。

## ★それなのに、なぜ松山へ戻る決心をされたんですか。

——家業を継いでいた長兄が49歳で亡くなつてしまつた。この兄の跡を継いだ方がいいとは思つたんだが、田舎に戻つて鍛冶屋をするかどうかを悩みましてね。仙台の大学で教鞭をとる兄、もう1人の行政書士の兄に対して、「両親の面倒を見に松山



これが「和釘」。長さは25センチ

# 体力と集中力

みるみるうちに「白鷹型和釘」が

仕事場は自宅と隣接していた。炉にはすでに火が入り、ゴーゴーと大きな音を立てて真っ赤に燃えさかっている。年季を感じさせる大きな電動ハンマー。白鷹さんの「戦場」である。厚手の前掛けをして炉の前に座った。千年の時の流れに耐える釘を作る白鷹さんの手元を裸電球が照らす。



釘作りが始まった。炉の中は1000度に達している。その炎の中へ、極めて純度の高い鉄で作られた長さ12センチほどの素材を3本放り込んだ。寿命の長い釘を作りだすのに一番苦労することは、いかに高純度の鉄を手に入れるかにあるそうだ。

加熱された鉄材が黒から赤を通り越して、黄色へと色を変えていく。その鉄を取り出し、電動ハンマーで叩きながら角状に延ばしていく。ここがクライマックスだ。電動ハンマーで叩くたびに真っ赤なスケールが飛び散る。叩きながら頭の部分を残し、角穴台に通して釘の太さを測る。ここまでが「荒延べ」という工程である。そして頭部分を加熱して潰して広げる。

再び「穂先」という先端部分を、さらに加熱して叩いて尖らせる。その後、余熱があるうちに全体を叩いておく。この時、鉄は赤から黒に代わっている。これを「叩き締め」という。千年を持たせるためには、この何秒という仕事が大切だそうだ。

## 記者も挑戦



に帰ってくれ」とはいえなかった。結局、3年ぐらい木屋に残ることにした。

この悩んでいる最中に思いがけない出会いがありました。昭和46年の4月、木屋の店頭でお会いした西岡常一さん（平成7年死去）という方です。この方は当時、最後の宮大工と呼ばれ、法隆寺や薬師寺の建造物の再建・修復に携わった棟梁でした。その時、ヤリガンナという古代道具の復元をしたいと思っていたので、西岡さんにそれを訴えたところ、図に描いて懇切丁寧に教えてくださった。それから文通が始まるわけです。全部で17通ほどいただきました。

そんな手紙のやり取りが続くうち、「両親をみなければならぬし、会社も私を手放さない」という悩みをちょっと打ち明けたんです。そして「会社も大変だろうけど、両親のところへ早く戻って、面倒をみてあげることが先決。腕に職を持つ人間は、どこへ行っても生活できるとにかく四国へ帰って鍛冶屋を再会しなさい」というアドバイスをいた

叩き締め最後の最後を「水打ち叩き締め」といって、ハンマーに水をつけて叩く。水をつけて打つと、水蒸気の爆発でスケール(熱した鉄の表面にできる皮)が吹き飛び、そして歪みを直し、空中で放冷させていく。

「白鷹型和釘」の写真が完成した。長さ8寸(25センチ)もある、見たこともない長さである。ひと仕事終えた白鷹さんは、私に「電動ハンマーの前に座りなさい」と前掛けを手渡ししてくれた。「まさか私が釘作りを……」。一瞬、全身に緊張が走った。電動ハンマーが一定リズムで動き出し、白鷹さんが「はい、始め」と合図してくれたが、ペダルの踏み加減が難しい。強すぎたり、弱すぎたり、思うように動かない。「角が直角になる釘」を作るのだが、私ができる釘の先が潰れてしまい、スプーンのような釘が出来上がってしまった。それにして打ち延ばすハンマーが重い。何回か打っただけで、早くも汗が出てきた。



まだ、赤く光っている鉄を打つと軟らかいものを打っている感じがするが、熱が冷めて黒くなつてからは、もう遅い。はね返る感触が、なにか固いものを打っているという感じしかない。「鉄は熱い打ちに打て」とは、よくいったものだ。

釘作りを体験させていただき「体力と集中力がいかに大切なものであるか」を実感した。白鷹さんは「仕事の後の、この一杯があすのエネルギーになるんじゃない」と、日本酒がなみなみとつがれたグラスを高々と上げた。

## 飛び散る真っ赤な火玉

だった。あの方にお会いしなければ私は決断できなかった。終生の課題としての「古代道具の復元」にも取り組めなかったかもしれない。

★すると白鷹さんが一番、影響を受けた方は西岡棟梁ですね。

もちろんです。こんなこともありましたよ。西岡棟梁の新築のお宅にお邪魔したときのことだった。「これも棟梁がお建てになったんですか」と聞くと、「いや、私は民家はよう建てまへんのや、大工に建ててもらいましたんや」といわれた。ある新聞に西岡棟梁の伝記が載ったことがある。そのなかで「西岡家には、民家を建ててはいけないという家訓がある」と書かれていた。そこで、白鷹さんは「それは違う。民家を建てる細かい技は宮大工より大工の方が上。ところが屋根が何10層もあって、ケタも反つて立っている柱の角度も全部異なるとなると、家大工にはできない。だから、民家を建ててはならないという家訓があるのは、宮大工としての感覚が疑われる。その感覚で寺の建物を建てたら笑われてしまう」ということなんだ。

僕は驚いたね。「民家を建てるのなんか阿呆らしい」というんかと思つたら、そうじゃない。「民家はよう建てませんねえ」という言葉に、この人はすごい人だと思った。人の仕事を尊敬する偉大さがある。それぞれの世界で真剣にやった職人は学者以上なんです。

西岡棟梁は学者嫌いでした。薬師寺の再建で学者を4〜5人呼んで意見を聞いた時、全面的に学者の意見を黙って聞いていれば良かったのだが、西岡棟梁が後ろで聞いていると、



西岡棟梁の遺影が、きょうも白鷹さんを見下ろす

彼らがまったくの素人での外れのことを言っていた。そこで意見をちよつと聞いた。すると、ある馬鹿学者が「大工風情が黙つとれ」といったらしい。

★その時、西岡棟梁は何といったのでしょうか。

——それはね。「では、お聞きしますが、1300年前に学者はおりましたか。1300年前に学者が、この建物を建てましたか。みんな大工が建てたんです。私はおかげさまで当時の大工の知恵を、法隆寺にいて大工の3代目として見てきました。学者だけで物が建つなら、どうぞ建ててください」と。それ以来、学者仲間は「法隆寺には鬼がいる」と言っただけですよ。鬼じゃない。当たり前のことを言っただけですよ。

★ところで、鉄にまつわる話をお聞かせください。

——鉄は宇宙から飛来してきたものなんです。その頃の地球は二酸化炭素は充滿していたが酸素はなかった。だから、飛来してきた鉄はまったく酸化しないまま、地球の内部に固まっていた。そして、たまたま何かの拍子に表面に噴出してきたところ、約40億年前に酸素ができ、そこで初めて錆びた酸化物として表面に現れるわけです。



れる素材の王様なんだ。

例えば、ワシが作ってる昔ながらの和包丁だって、尖端の鋼の粒子が酸化によって剥がれ落ちる。つまり、常に新陳代謝して切れ味を保つ。自然に薄くなってくれるんですよ。剥がれ落ちた鉄はどこへいくかというと、食べ物と一緒に体に吸収され、ヘモグロビンになるわけです。そして脳にたっぷり酸素を送ってくれるという具合だ。

★「鉄学」の世界も奥深いですね。では、職人の世界は……。

——東京で異業種間交流の会で、講演を頼まれた時の話ですがね。私は「居並ぶ大企業の重役たちを前に、西岡棟梁から学んだ話を基に「飛鳥・白鳳の技と知恵」という題名で話をした。知識は活字のなかで覚えたも

そして人類がずっと後に誕生する。鉄の酸素を除去して還元させ、鉄のオキシドを作って、それを道具とした。だから鉄も宇宙の生成物の1つなんだ。それを工夫して享受しているのに、その鉄で戦争をするという愚かさ。人間の悲しい性ともいえるのかな。

大体、鉄という字は、今でこそ金偏に失うと書くが、旧字は「鐵」。この字を分解すると「金の王なる哉」と書く。人の営みと文化を支えてく

# 「知識の前に知恵がある」

ので、知恵は実体験のなかで覚えた動物的な感覚ですね。要するに、法隆寺や薬師寺は、あまり知識で建てたわけじゃないというわけです。

現代の知識で建ったものが70年しか持たないのに、なぜ知恵で建ったものが1300年も持つかの。やはり、そこには知恵の集積があったわけです。すなわち「知恵」が見直されつつあります。いまは何をするにもコンピュータでやっているが、その誤りに気がつかない。コンピュータを直すコンピュータはないわけです。それが怖い。

企業の方たちは口をそろえて「会社に職人がいなくなつた。試作品一つを作るにも、満足にヤスリがけも出来なくて困る」という。しかし、企業の側にも問題がある。僕は「なぜ、腕のいい技術者を残さなかつたのか。定年というだけで、なぜ退職させるのか」といったんです。

★白鷹さんの人生観は、やはり「自由闊達」ということでしょうか。

——とても專業では食えないので、困ることは錢に追われるということだけで、後は自由だ。こんな自由はなかなか享受できない。なかでも発言の自由は大きいですね。職人社会で、なぜ生きてこられたかというところ「発言の自由」があつたからです。役人だったら、そうはいかない。僕



① 熱く語る白鷹さん  
② 白鷹さんの戦場  
③ ご夫妻と右が3代目の息子さん

も親父や兄貴と同じ野鍛冶です。私は3代目を継がせようと思つてる息子が、私を見ていて「いまの世の中は自由だといふけれど、サラリーマンを見ていると自由はない。圧迫がある。だけど親父にはある」といつとる。それが僕の後を継ぐ一番の理由なんだと思います。

現代は物で栄えて心で滅んでしまった。「ありがとう」「お蔭さまで」という、言葉の意義はすっかり廃れてしまった。これを心なき17歳の少年たちに教える効果のないことももしれないね。でもね、いまの若い人たちが可哀相なのは将来が非常に暗いような気がするんだ。僕らの時代には目標が持てた。おぼろげながら、どこかに青空が見えたよね。その点、いまはそれだけ社会が過密になつたということかな。何が真かわからない。

★いま、少年犯罪が社会問題化していますが……。

——子供がちゃんと成長するためには、親が絶対に嘘をつかないことだね。嘘をついたらその日から子供は親のことを信用しなくなる。おかげさまで、私も女房も子供に嘘をつく必要がなかつた。その環境の良さに僕はつくづく感謝するね。僕は4人の子供たちが本当にまともな育ち方をしてくれたいと思うね。それだけで

僕の人生は半ば成功したと思つとる。しかし、今はそうもいかんねえ。ITという言葉が、はやつておるよ。うだが、実態のない世界で余計に嘘でないような嘘が通用するんだね。だから余計に怖い気がするね。

★IT時代に入つたいま、改めて考えさせられるお話でした。ありがとうございました。

(おわり)